

REPORT

尿道留置カテーテルの 管理方法とテープ固定に 関する実態調査

2025.6.30 作成

はじめに

skinixは2025年6月、尿道留置カテーテルにおける管理方法とテープ固定に関する実態調査を実施しました。

本レポートでは、315名の医療従事者から得られた回答を元に、尿道留置カテーテルにおける管理方法とテープ固定の実態を3項目に分けて報告します。

※本レポートの著作権はskinixが保有しますが、著作権法上認められている引用などの利用について制限はございません。
引用の際は出典を明記してください。

回答者315名の属性

勤務先

病院	216名(68.6%)
診療所/クリニック	8名 (2.5%)
訪問看護ステーション	72名 (22.9%)
介護/老健施設	14名 (4.4%)
その他	5名 (1.6%)

職種

看護師	309名(98.1%)
医師	2名 (0.6%)
助産師	1名 (0.3%)
臨床検査技師	1名 (0.3%)
理学療法士	2名 (0.6%)

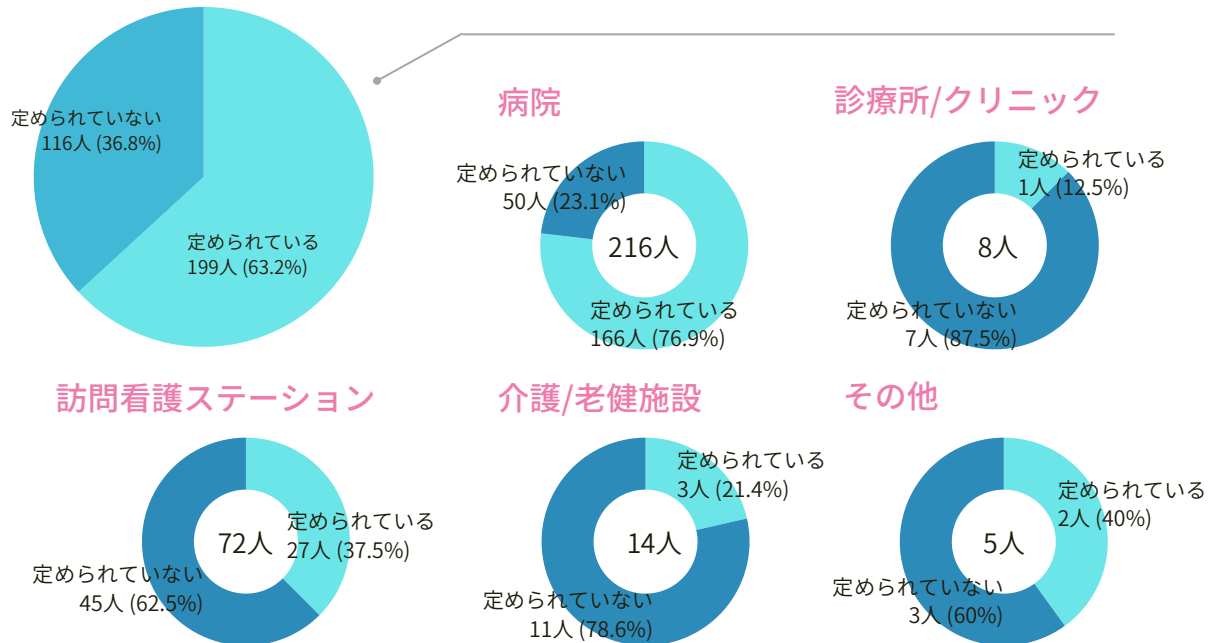
役職

部長・看護部長クラス以上	15名 (4.7%)
課長・看護師長クラス	64名 (20.3%)
主任クラス	89名 (28.3%)
一般（役職なし）	147名(46.7%)

1. 尿道留置カテーテルの管理方法の実態

尿道留置カテーテルの管理方法の基準・マニュアルの有無や固定の実態について調査しました。

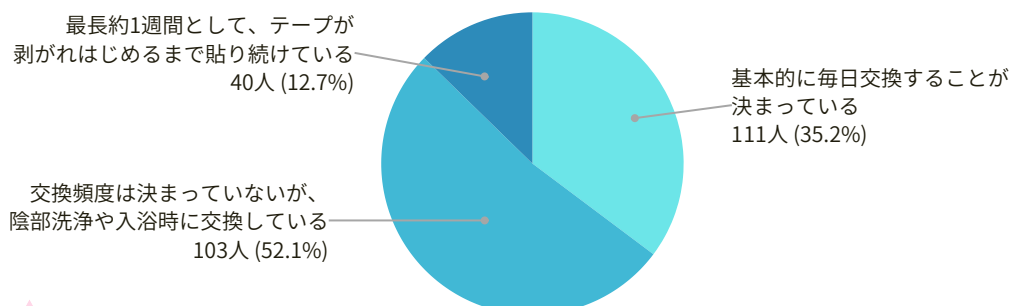
尿道留置カテーテルの管理方法の基準・マニュアルが施設内で定められていますか？



回答者の施設の約4割では、管理方法に関する基準やマニュアルが定められていないことが明らかになりました。

施設別に見ると、病院では約8割の施設で基準やマニュアルが定められている一方、それ以外の施設では定められていない割合が高くなっています。

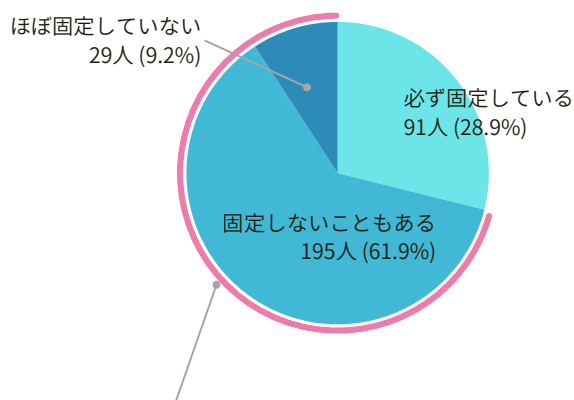
固定テープの交換はどれくらいの頻度で行っていますか？



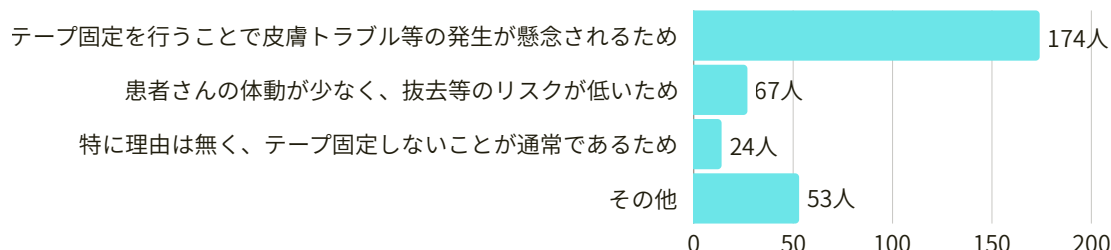
3割以上の方が基本的に毎日交換している一方で、6割以上の方は交換頻度が決まっておらず、陰部洗浄や入浴時に交換、あるいはテープが剥がれるまで貼り続けているという実態が明らかになりました。

また、基準やマニュアルが定められている施設では「毎日交換」とするケースが多く、定められていない施設では複数日にわたって使用する傾向が見られました。

テープ等で、下腹部・大腿部に固定されていますか？



固定しない理由を教えてください。(複数回答可)



その他の固定しない理由には以下のようなものがありました。一例を紹介します。

- リハビリ時に、固定していることで不都合が生じるため
- せん妄や認知機能の低下により尿道留置カテーテルの固定が、自己抜去やテープテアといった二次損傷を引き起こす可能性があるため
- テープ固定することが定着していない
- 固定方法によって亀頭部が裂ける人がある
- 頸髄損傷で体動されないため固定していない
- 日中Dibキャップ使用し、夜間ウロバックにつなげるが本人の理解力があり、DIBキャップ使用中はテープ固定があると尿を出しづらいため。それ以外は必ず固定している。
- 自分で剥がしてしまう
- 利用者の金銭的理由
- 下着を履くことである程度固定され、またテープ固定することでむしろ硬い部分が下着のゴムで圧迫される箇所が増えてMDRPUのリスクが上昇すると判断されるから
- 尿の流出にミルキングが必要、または向きによって流出が変わる
- 家族の意向。基本的には固定することを勧める
- 固定することで閉塞トラブルが起きる方がいる

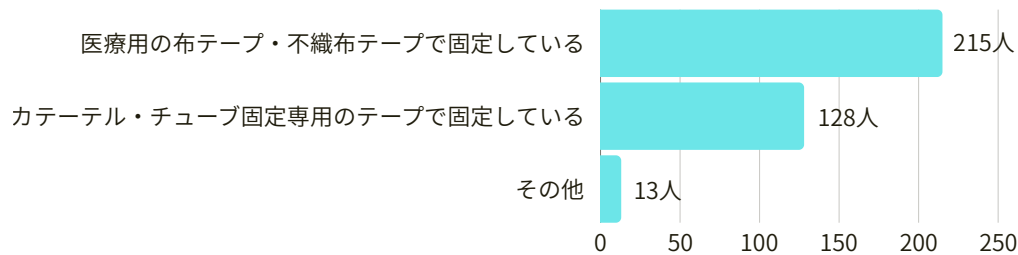
約3割の方が必ず固定している一方で、患者さんの状態やご家族の意向に応じて、あえて固定しないという選択をするケースも多いことがわかりました。

特に、テープ固定による皮膚トラブルへの懸念から、固定を避ける傾向が見られ、今後は皮膚への影響を抑える工夫や製品のニーズが高まっていることが示唆されます。

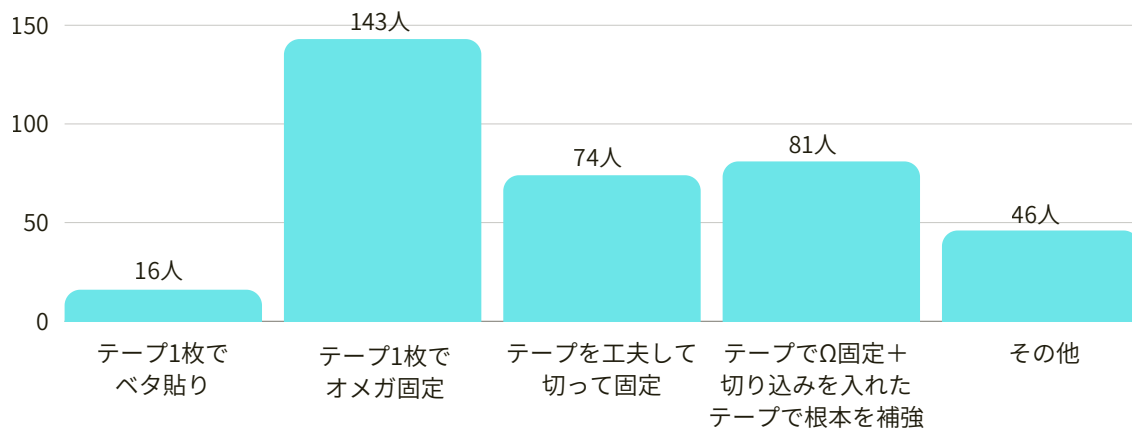
2. 固定テープの種類と固定方法・課題について

尿道留置カテーテルを固定するテープについて、テープの種類と固定方法について、調査しました。

固定する際はこういったテープで行っていますか？（複数回答可）



【医療用の布テープ・不織布テープで固定している場合】
どのように固定していますか？下の写真から近い固定方法を選んでください。（複数回答可）

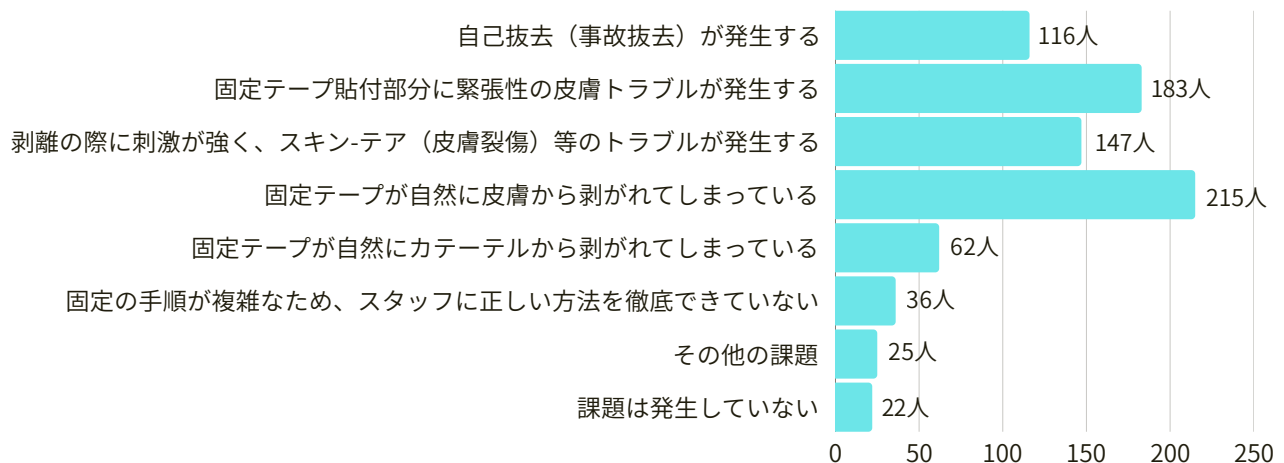


その他の固定方法には以下のようなものがありました。一例を紹介します。

- テープ2枚でオメガ貼り
- 土台テープを貼付、その上にΩ固定
- 重ねて2枚貼り
- フィルムドレッシングを皮膚に貼る→切込み入れた布テープΩ固定→布テープΩ固定

固定強度を高める「オメガ固定」を実施している方は多く、広く活用されていることが分かりました。また、ベーステープとしてフィルムドレッシングを使用しているケースも多く、固定力の確保だけでなく、皮膚へのやさしさにも配慮した工夫がなされていることがうかがえます。

固定中に、下記のような課題は発生していますか？(複数回答可)



その他の課題は以下のようなものがありました。一例を紹介します。

- 男性で尿道口の亀裂ができてしまう。水疱症でテープ部分に水疱ができてしまう。
- 男性は特に腹部に固定することで尿道裂孔を生じる。指2本入る程度の引っ張り具合で固定している。
- Ωの貼り方が周知できない
- 尿道裂傷、尿道下裂
- デイサービスや訪問入浴などでヘルパーさんに図式しても緊張が強い状態での固定がされ、どう伝えるとわかってもらえるか悩む
- テープ固定していることでカテーテルがねじれて尿漏れに繋がったケースが多いのでテープ固定しない選択をせざるを得ない。(歩ける方だった)
- 固定が定着していないので課題が抽出できない
- 貼りっぱなしで交換されていないことが多い。剥がれたまま貼り直されないことが多い。固定する際にカテーテルにゆとりがなく固定されることがある。
- 院内統一マニュアルがないため、ケアが統一されていない/退院時指導も統一されていない/男性は下腹部、女性は大腿、がパジャマの場合や、自己抜去のリスクがある患者の場合含め周知徹底されていない/尿道口のMDRPUが発生している
- 移乗動作後にチューブ捻転している

固定中に発生している課題として最も多かったのは、「固定テープが自然に皮膚から剥がれてしまっている」ことでした。

次いで、「固定テープ貼付部分に累積性の皮膚トラブルが発生する」、「剥離の際に刺激が強く、スキン-テア（皮膚裂傷）等のトラブルが発生する」と、皮膚トラブルに関する課題が多数挙げられています。

また、「自己抜去（事故抜去）が発生する」や、「固定テープが自然にカテーテルから剥がれてしまっている」という声もありました。

さらに、「固定の手順が複雑なため、スタッフに正しい方法を徹底できていない」という運用面での課題も見られました。

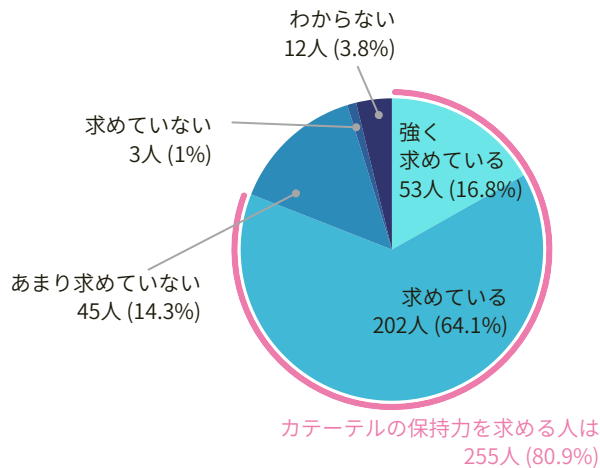
一方で、「課題は発生していない」と回答したのは22人にとどまり、何らかの問題を感じている施設が大多数であることがわかりました。

3. いま、尿道留置カテーテルの固定用テープに求めること

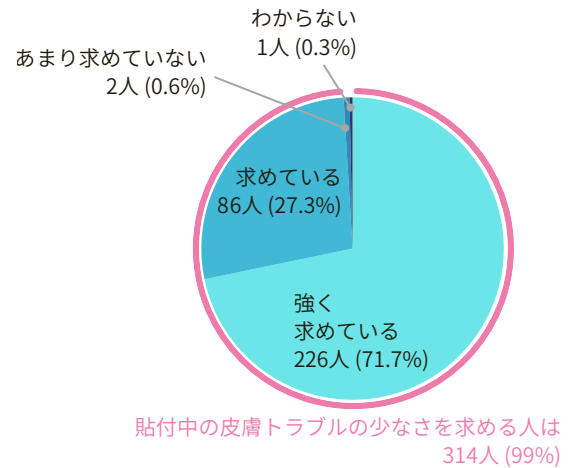
中心静脈カテーテルと末梢静脈カテーテルのそれぞれにおいて、刺入部固定用のフィルムドレッシングにどのようなことを求めるかを調査しました。

尿道留置カテーテルの固定用テープに、以下のことを求めていますか？

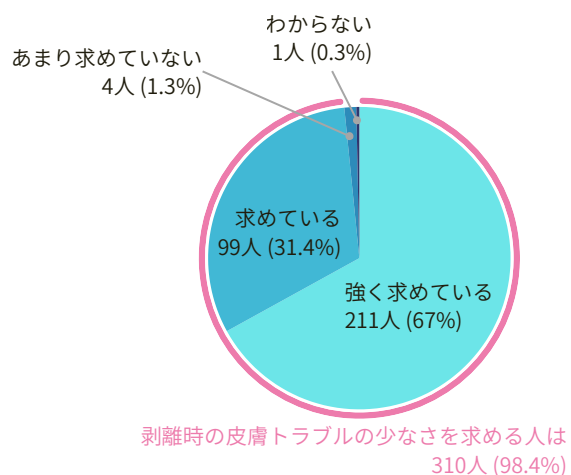
カテーテルの保持力



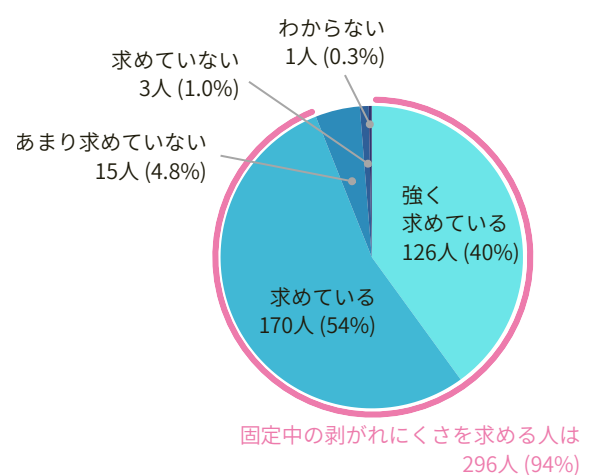
貼付中の皮膚トラブルの少なさ



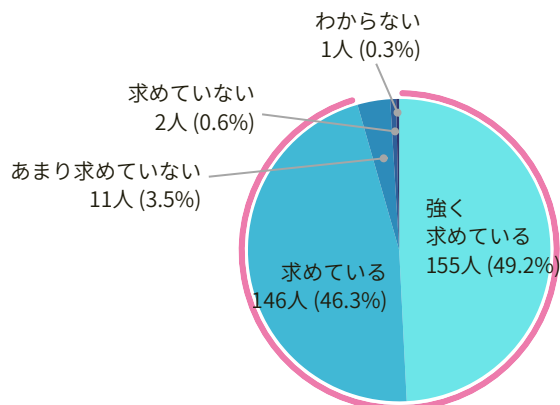
剥離時の皮膚トラブルの少なさ



固定中の剥がれにくさ



手順の簡単さ・統一のしやすさ



手順の簡単さ・統一のしやすさを求める人は
86人 (84.3%)

尿道留置カテーテル固定用のテープに対して最も求めることは「皮膚トラブルを起こさないこと」であり、貼付中の皮膚トラブルの少なさを求める人が99%、剥離時の皮膚トラブルの少なさを求める人は98%にのびりました。

それに続いて求められている要素は、上位から順に「固定中に剥がれにくいこと」「手順が簡単で統一しやすいこと」「カテーテルをしっかり保持できること」でした。

これらの結果から、皮膚にやさしく、かつ確実に固定できるテープが強く求められていることがわかります。また、手順が複雑だと誤った固定や現場でのバラつきが生じるため、誰でも簡単に貼れることも重要な要素と捉えられています。

まとめ

- 基準やマニュアルが整備されている施設は全体の約6割にとどまり、病院とそれ以外の施設とでは整備状況に大きな差があることが明らかとなりました。さらに、マニュアルが整備されている施設であっても、患者さんの状態やご家族の希望に応じて、あえてマニュアルに沿わない対応がとられるケースも多く見受けられました。
- 固定方法については、オメガ固定やベーステープの使用など、固定力と皮膚へのやさしさの両立を図った工夫が多く見られました。一方で、固定に関するトラブルとしては、皮膚トラブルといった身体的な課題が多く報告される一方で、手順の煩雑さといった運用面での課題も挙げられており、何らかの問題を抱えている施設が大多数を占めていました。
- 尿道留置カテーテル固定用テープにおいては、「皮膚トラブルを起こさないこと」が最も重視されていることが分かりました。加えて、剥がれにくさや手技の簡便さといった要素も求められており、固定力と皮膚へのやさしさを両立した高機能な製品が必要とされている現状が明らかとなりました。